

# 「所が狭くて困つてゐるのは、おれ許りではなかつた」

——『坊つちやん』論——

佐藤 裕子

## 序

作品『坊つちやん』は、下女の「清」という人物から「坊つちやん」と呼ばれていた一人の男の回想の物語である。物語は一貫して「坊つちやん」と呼ばれた男の視点を通して、彼自身が「おれ」という一人称を用いて自らの半生を語るという結構になっている。この物語構造は『吾輩は猫である』第一章、『濠虚集』中の一人称作品である「倫敦塔」、「カーライル博物館」、「琴のそら音」、「趣味の遺伝」、そして『坊つちやん』に共通する構造で、ある一定の時間が経過した時点から自らの体験した出来事を報知しつつ、それらの出来事について何を感じ何を考えたかを、すなわち「語り手」の意識を克明に再現してゆくというものである。この方法は後に『坑夫』において、より先鋭化した形で繰り返されるのであるが、さらに物語内容に踏み込んでいえば、『坊つちやん』は後に続く『草枕』、『虞美人草』、『三四郎』に共通する「遠いところからやってきた一人の青年がすでに進行しつつある出来事に途中から参加し立ち会ってゆく」という物語の原型となっているのだ。『坊つちやん』から『三四郎』に至る一連の物語は、物語が開始した時点で「遠いところからやってきた青年をめぐる物語」と、「青年に関わりなく進められていた物語」<sup>(1)</sup>と、「青年が

参加してからの物語」と、少なくとも三つの物語を内包しているということである。つまり『坊つちゃん』には、〈坊つちゃん〉と呼ばれた男自身の物語」と、〈彼に関わりなく赴任地で繰り広げられていた物語〉と、〈彼が新たに加わることによって展開する物語〉の三つの物語が隠されているということだ。

さらに〈遠いところからやってきた男〉という設定をはずして、〈二人の男がすでに形成されている関係の中に途中から参加する物語〉という枠組みを考えると、今度は『三四郎』を越えて『門』、『彼岸過迄』、『こゝろ』にまで継承されている。『門』は安井とお米の関係に宗助が参入する物語であつたし、また『彼岸過迄』では市蔵を中心とした関係の中に敬太郎が参入することで物語が開始されたし、『こゝろ』では「先生」と奥さんの前に「私」という青年が姿を現したことがすなわち、「先生」がその半生を振り返る契機となつていったからである。考えてみれば『吾輩は猫である』もまた、一人の青年ならぬ一匹の猫が苦沙弥家に迷い込み、家族のみならず苦沙弥家に出入りする人間関係を途中から垣間見るといふ構造であつたことを忘れてはならないだろう。ただここでは、「人間」の男の物語に限定し、「猫」の物語はひとまずおくとして、そうすると漱石作品の中で（細部の異動はあるにしても）、〈遠くからやってきた〉〈二人の男がすでに進行しつつある出来事に途中から参加し立ち会つてゆく〉物語群のその起点となるのが、『坊つちゃん』であるといふことができる。

「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る。」（一）という作品冒頭の一文には、他の漱石作品と同様に実に多くの情報が隠されている。このように語り出した人間はすでに自分を「小供」だとは考えていないし、自分の性格を「無鉄砲」と規定した上でその性格が「親譲り」のものであることを断言し、何よりその性格の故に「損ばかり」してきたと考えているということである。さらに重要なことは、この人物が自分が仕出かしてきたことに対して「損」という価値判断を下すということは、その対極にある「得」という価値を知っているということだ。読者は「無鉄砲」という言葉から単純に〈あと先を考えずに行動する〉〈向こう見ず〉な人物を連想するが、この一文を語る人物はすで

「所が狭くて困つてゐるのは、おれ許りではなかつた」

に「あと先を考えずに行動した」ことによつて「損」をし、もし「あと先を考えていたら」「損」はしなかつたことを知っているのである。言い換えるならば、この人物はすでに自らの半生を相対化することができる視点を手に入れてゐるということである。この冒頭の一行は、過去の出来事を回想し始めた時点で『彼岸過迄』『行人』『こゝろ』に共通する「回想」がそうであつたように、かつて理解できなかったものが今は理解できるというある痛みを伴つた思いによつて支えられてゐる。一体彼に理解できなかったこととは何か。

## 一 第一章の果たす役割

作品『坊っちゃん』においては、「おれ」という人物が「四国辺のある中学校」(一)へ赴任することになるまでの二十三年四ヶ月の出来事が回想される第一章と、赴任してからのほぼ一カ月の出来事が回想される第二章から十一章までと、大きく二つの部分に分けることができる。作品の分量から類推して、紙幅の大半が「おれ」の赴任後の出来事に焦点が絞られてゐることから、漱石の創作の意図が第二章以降にあることは比較的容易に推測することができるのであるが、たとえば作品の主眼が第二章以降にあつたとしても、他の漱石作品同様第一章の果たす役割は重要である。

すでに触れたように、『坊っちゃん』は「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る。」という一文に続いて、「無鉄砲」の例として幼少年期の記憶をたどるところから始められている(二・この節での引用は特記のない限り一章からのものである)。まず小学校時代に「二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした」顛末にからめて父とのやりとりが回想され、さらに山城屋に詫びを入れて「給の片袖」を取り返してきてくれた母の記憶に移行し、様々な「いたづら」を紹介した後に、唐突に「おれ」が家族からどのように扱われていたか、父、母、兄、そして「十年来召し使つて居る清」との関係について「おれ」がどのように考えていたかが語られてゆく。そしてまず母が死に、六年後に父が死に、兄は「何とか会社の九州の支店」へ赴任するために財産を処分し、「九州へ立つ二日前」に「おれ」に六百円

「所が狭くて困つてるのは、おれ許りではなかつた」

の財産分与をし、任地へ旅立つ。そしてたった一人残された「おれ」が、六百円を学資として物理学校に入学し、唯一の味方である「清」とも別れ、数学の教師として「四国辺のある中学校」へ旅立つまでの二十三年と四ヶ月の出来事が描かれている。この構図は『吾輩は猫である』から引き継がれたもので、「猫」もまた「何でも薄暗いじめくした所でニヤ／＼泣いて居た」(『吾輩は猫である』一)ところを、書生の「掌に戴せられてスーと持ち上げられ」「ふと気が付いて見ると」「沢山居つた兄弟」(同)も「肝心の母親さへ姿を隠して仕舞」(同)い、たった独りとなったところから回想を始めていた。そして「笹原を這ひ出」(同)して「大きな池」(同)の周りを歩き始め、「竹垣の崩れた穴」(同)から苦沙弥邸へ潜り込み、その住人となることを選り取つていったのだ。「坊つちやん」もまた家と家族を失つたところで、兄から分与された六百円をもとに自ら物理学校に入学し、また自ら「四国辺のある中学校」へ赴任することを選び取つてゆくのである。それにしても『坊つちやん』以降の漱石作品において、その主要な登場人物の幼少期やその生い立ち、あるいは両親や兄弟姉妹との関係が回想される場合、物語の途中で回想される場合が多い。例えば『虞美人草』では小野さんの過去は四章で明かされるし、『坑夫』では「自分」が家を飛び出した理由が明かされるのは、茶店を出て「神楽坂位な繁昌する所」へ着いた頃であった。また『門』では宗助と弟の小六との関係が回想されるのは、やはり四章の途中からであつたし、『彼岸過迄』では父と母と早逝した妹との幼い頃の記憶が回想されるのは「須永の話」第三章以降のことであつた。また『こゝろ』では「先生」が両親の突然の死を語り出すのは「先生と遺書」第三章であり、『道草』では健三の〈過去〉はまず十五章と、さらに三十八章から四十三章と分けて回想されており、作品の途中に〈過去〉が挿入される形に統一されてゆく。これは『虞美人草』以降の漱石作品に共通する〈過去が現在を規定してゆく〉という物語構造の故に、〈過去の出来事〉そのものよりも、先に彼らの〈現在〉を示すことで、〈過去〉と〈現在〉の対比をより際立たせるために途中で挿入される形となつたと考えられる。ところが『吾輩は猫である』と『坊つちやん』においては、まず物語が始まる前提として〈天涯孤独の境地〉に立たされた人物が

「所が狭くて困つてるのは、おれ許りではなかつた」

〈語り手〉として設定され、家も家族も持たないがゆえに〈帰属する場所〉を求めて旅立つことが物語が成立するための絶対条件となつてゆくのである。

先述したように物語は「おれ」がやった「いたづら」を紹介するところから始められる。ここではまず小学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事、西洋製のナイフで右手の親指の甲を斜に切り込んだ事、隣の質屋の息子勘太郎をつかまえて四つ目垣ごと向こうの領分に落としてやった事、茂作の人参畠を荒らした事、古川の持つて居る田圃の井戸を埋めた事という五つのエピソードの後に「おれ」がどのように家族の目に映っていたかを回想する箇所が続く。それぞれ（一）父に関する記述、（二）母に関する記述、（三）兄に関する記述を抜き出すと次のようになる。

（一）父についての記述を抜粋する。

①小使に負ぶさつて帰つて来た時、おやぢが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、此次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

②おやぢは些ともおれを可愛がつて呉れなかつた。

③おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやぢが云つた。

④母が死んでからは、おやぢと兄と三人で暮らして居た。おやぢは何にもせぬ男で、人の顔さへ見れば貴様は駄目だ／＼と口癖の様に云つて居た。何が駄目なんだか今に分からない。妙なおやぢがあつたものだ。

⑤おやぢがおれを勘当すると言ひ出した。其時はもう仕方がないと観念して先方の云ふ通り勘当される積りで居たら、十年来召し使つて居る清と云ふ下女が、泣きながらおやぢに詫まつて、漸くおやぢの怒りが解けた。

⑥それにも関らずあまりおやぢを怖いとは思はなかつた。

⑦おやぢも年中持て余してゐる。

⑧おやぢは頑固だけれども、そんな依怙最肩はせぬ男だ。

「所が狭くて困つてるのは、おれ許りではなかつた」

⑨ おやぢには叱られる。

⑩ 只おやぢが小遣を呉れないには閉口した。

⑪ 母が死んでから六年目の正月におやぢも卒中で亡くなつた。

⑫ 僕あ、おやぢの死ぬとき一週間許り徹夜して看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱つた事がある。(十)

従来、父との関係のみならず「おれ」と家族との関係については、〈愛情の薄いものであつた〉という「おれ」の〈語り〉が疑われることは殆どなく、わずかに「父親の冷淡さは、無私の愛の理性的な一極」<sup>(2)</sup>とする山田晃氏の論や、①の二階から飛び降りた事件で、父と「おれ」とのやりとりを「親子の息がびたりと合つてゐる」<sup>(3)</sup>箇所だとする高木文雄氏の論によつて見直しを促されたものの、これらの論も父の「冷淡さ」そのものを疑うものではなかつた。しかし⑦で「おやぢも年中持て余してゐる」と語りつつ、⑥の「あまりおやぢを怖いとは思はなかつた」点や、⑧で示される「そんな依怙最良はせぬ男だ」という父に対する信頼や、⑫で語られる父の臨終に際しての献身から考えると、「おれ」と父親との間には十分な信頼と交流が存在したことが伺われる。<sup>(4)</sup>これこそがまさに一人称の〈語り〉の特質ともいふべきもので、「おれ」の〈語り〉は常に重層的な意味を孕んでゐるということである。

(二) 母についての記述を抜粋すると次のようになる。

① 其晩母が山城屋に詫びに行つた序でに袷の片袖も取り返して来た。

② 母は兄許り最良にして居た。

③ 乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云つた。

④ 母が病気で死ぬ二三日前所で宙返りをしてへつつい角で肋骨を撲つて大に痛かつた。母が大層怒つて、御前の様なものゝ顔は見たくないと云ふから、親類へ泊まりに行つて居た。するととう／＼死んだと云ふ報知が

「所が狭くて困つてゐるのは、おれ許りではなかつた」

来た。さう早く死ぬとは思はなかつた。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかつたと思つて歸つて来た。

⑤ 母も死ぬ三日前に愛想をつかした。

⑥ 母が死んでから五六年の間は此状態で暮して居た。

母についても同様で、「おれ」が回想する母についての記述の中で重要なのは⑤の「死ぬ三日前に愛想をつかした」という一文であろう。①の詫びついでに「裕の片袖を取り返して来た」ことから推測されるが、「乱暴で乱暴で行く先が案じ」られつつも、「死ぬ三日前」までは愛想をつかさずに「おれ」を見守っていたと、少なくとも「おれ」はどのように回想しているということである。

(三) 兄についての記述を抜粋すると次のようになる。

① 此兄はやに色が白くつて、芝居の真似をして女形になるのが好きだつた。

② さうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれの為めに、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜しかつたら、兄の横つ面を張つて大變叱られた。

③ 兄は実業家になるとか云つて頻りに英語を勉強して居た。

④ 元来女のような性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一遍位の割で喧嘩をして居た。

⑤ ある時将棋をしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しさうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車を眉間へ擲きつけてやつた。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやぢに言付けた。

⑥ 兄とは無論仲がよいけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆を貰ひたくない。

⑦ なぜ、おれ一人に呉れて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄ましたもので御兄様は御父様が買つて御上げなされるから構ひませんと云ふ。

⑧ 其癖勉強をする兄は色許り白くつて、逆も役には立たないと一人できめて仕舞つた。

⑨ 兄とは喧嘩をする。

⑩ 兄は何とか会社の九州の支店に口があつて行かなければならん。兄は家売つて財産を片付けて任地へ出立すると云ひ出した。

⑪ どうせ兄の厄介になる気はない。世話をしてくれるにした所で、喧嘩をするから、向でも何とか云ひ出すに極まつて居る。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならぬ。

⑫ 兄は夫から道具屋を呼んで来て、先祖代々の瓦落多を二束三文に売つた。

⑬ 婆さんは何も知らないから年さへ取れば兄の家がもらへると信じて居る。

⑭ 兄とおれは斯様に分れたが、困つたのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくつ付いて九州下り迄出掛ける気は毛頭なし、と云つて此時のおれは四畳半の安下宿に籠つて、夫すらもいざとなれば直ちに引き払はねばならぬ始末だ。

⑮ 九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出して是を資本にして商売をするなり、学資にして勉強をするなり、どうしても随意に使ふがいゝ、其代りあとは構はないと云つた。兄にしては感心なやり方だ。何の六百円位貰はんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊な処置が気に入つたから、礼を云つて貰つて置いた。兄は夫から五十円出して之を序に清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場で分かれたぎり兄には其後一遍も逢はない。

⑯ 十六七の時ダイヤモンドを拾つた夢を見た晩などは、むくりと立ち上がつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常な勢で尋ねた位だ。其時は三日ばかりうち中の笑ひ草になつて大いに弱つた。(四)

さらに兄については、②で臨終の床にある母に心配をかける「おれ」の方が悪いのは当然で、ここでの兄の言い分



は正しい。この兄の発言に対して「口惜しかつたから」殴りつけるというのが「おれ」のやり方であり、⑤の将棋のエピソードも同様で、この「おれ」の理不尽な暴力こそ、母が「行く先が案じられる」と嘆いたものであろう。それ以外ではひたすら兄が「女の様な性分で、ずるいから」喧嘩ばかりして、仲がよくなかつたことが繰り返されている。しかしこれは父や母に関する記述と同様に一方的に「おれ」が考えたことであり、兄の方はどうかという例え⑩のエピソードは、寝ぼけた「おれ」の様子が「そばに居た兄」によって家族に伝えられ、「三日ばかりうち中の笑ひ草になつて大いに弱つた」というのであるが、ここでは双方に陰湿なものは感じられない。また⑪で「世話をしてくれるにした所で、喧嘩をするから、向でも何とか云ひ出すに極つて居る。」というのであるが、兄は何も言わず六百円の財産分与をしたのであつて、「何とか云ひ出すに極つて居る」とは、「おれ」の推測にすぎないのだ。しかもこの兄は弟に六百円の財産分与をし、さらに長年奉公した「清」にも五十円の餞別を残すという常識的な手配をしているのだ。「おれ」が考えているように、本当に「ずるい」のであれば財産を分けることはしないだろう。また⑧では兄が「よく勉強する」ことを認めており、「おれ」の兄に対する複雑な感情が見え隠れするところである。

このようにして両親と死別するまで「おれ」がどのような扱いを受けていたか、そして唯一残つた肉親である兄とどのように分かれたかが、一方的かつ複雑な感情に彩られつつ回想されるのであるが、さらに複雑なのが「清」についての回想である。「清」についての記述が現れるのが、(三)⑤将棋のエピソードで父が「おれ」に勘当を言い渡す場面においてである。家族からも十分に可愛がられていないと考え、「到底人に好かれる性ではないとあきらめて居たから、他人から木の端の様に取り扱はれるのは何とも思はない」「おれ」が、「清の様にちやはやしてくる」のを「不審に考へた」というのである。確かにひとかどの人物になることを疑わない「清」の言葉を信じ、「矢つ張り何かに成れるんだらうと思つて居た」ことを語りはするものの、当時の「おれ」は「清」が示す様々な愛情表現に対して、「気味がわるかつた」「不審に思つた」「つまらない、廃せばいゝの」と思つた「気の毒だと思つた」と否定的な感情

を抱いていたことを回想するのである。しかも注意しなければならないのは、「清」の〈家〉に対する拘りと「何かにつけて」繰り返される「あなたは御可哀想だ、不仕合だ」という言葉である。「おれ」と「清」との関係については、従来から様々な解釈がなされてきたが、例えば平岡敏夫氏は「下女や婆やのかわりに、恋人か愛妻を入れかえれば、もっとぴったりする。」<sup>(5)</sup>として、「清」には「恋人・妻のイメージ」<sup>(6)</sup>が与えられていると指摘している。また高木文雄氏は「清を坊つちやんの生母」<sup>(7)</sup>と考えると「家族の冷たさも、清の人目を避けた偏愛も納得がいく」<sup>(8)</sup>とするのであるが、「清」が「恋人・妻のイメージ」であるかどうかはさておき、「坊つちやん」が庶子であるという仮定が作品から推測可能な解釈であるとするならば、もう一つ逆の可能性も出てくる。兄が庶子かあるいは先妻の子供の可能性、つまり「おれ」と兄とが異母兄弟であるという設定である。これらのことは作品のどこにも書かれていないが、父と母の本当の子供であるからこそ、「乱暴で乱暴で行く末が案じられる」と嘆きもでき、また遠慮なく「貴様は駄目だ」ということもできると考えることも可能だからだ。たとえ庶子であっても、また歌舞伎の女形の真似をするような長男であっても、長男は長男で〈家〉を継ぐのが当然である。もしそうだとするならば、真実を知っていて本来ならばこの〈家〉を継ぐべき正統の嫡子は「坊つちやん」であると考えている「清」が、〈家〉の相続に拘り、何かにつけて「御可哀想だ、不仕合だ」と語ってきかせるも無理はないとも考えられるからだ。『虞美人草』において甲野欽吾・藤尾という異母兄妹を設定し、また『彼岸過迄』において市蔵という庶子にして長男という家長を設定した漱石である。残念ながら『坊つちやん』においては、「おれ」と「清」の関係を決定づける確たる記述は無いのであるが、いずれにしても「清」は「おれ」に対して家族とは正反対の対応をし、二章以降赴任先で〈人間の分かり難さ〉にぶつかるとびに「清」を思い出し、「清」こそが「おれ」の価値判断の基準となる人物であることは間違いない。そして物語は家族のみならず「清」とも別れ、たった一人で「四国辺のある中学校」に赴任することを決意し、旅立つところまでが描かれるのだ。最終的に「おれ」は再び東京に戻り、「清」と一緒に暮らすことを選び取るのであるが、そこに至るま

「所が狭くて困つてゐるのは、おれ許りではなかつた」

でにどのような出来事が「おれ」の上に起こるのか。

## 二 四国で繰り広げられていた物語

『坊っちゃん』第一章が〈回想〉であることを前面に押し出す〈語り〉であるとしたら、二章以降は〈語り手〉の〈意識の流れ〉を詳細に追う傾向が強まってゆく。例えば第二章で校長から辞令を受け取った所で「此辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込んで仕舞つた。」(二)という明らかに回想であることを示す一文を除いて、殆ど現在進行形と錯覚させるような〈語り〉によって進められてゆく。そもそも『坊っちゃん』においては、十一章の「清の事を話すのを忘れて居た。」(十一)という一文によって、この物語全体が表面に現れてはこないが物語内に存在する〈聞き手〉に対して語られるという構造を持つ作品であることが理解できるのであるが、この「語られる時点の(いま)〈ここ〉に即した語り」<sup>(10)</sup>は、まさに物語内に設定された〈聞き手〉を飛び越えて直接読者に語りかけているような錯覚を読者に抱かせ、〈語り手〉が饒舌であればあるほど〈語り手〉と読者の距離は近くなるという効果を持っている。「おれ」はまず船頭のいでたち、海が光ること、船の上から眺めた町の様子、中学校の場所を聞いた小僧という具合に、「おれ」の視界に入つたものごとくについて、どのように判断し考えたか、あるいは感じたか、その自らの〈意識の流れ〉を克明に語るのであるが、それはまた同時に読者には「おれ」が意識したことしか伝わらないという一人称の〈語り〉特有の限界を示していることでもある。ともあれ、ここから読者は「おれ」の〈語り〉に強く誘導されつつ、「おれ」と共に四国に足を踏み入れてゆくこととなる。

作品の第一章が〈おれ〉が四国に赴任するまでの彼自身の物語〉であるとしたら、二章から十一章までを、その内容によつて大きく二つに分けることができるだろう。着任早々巻き込まれたバツタ事件を中心として、「おれ」がこの地ですでに繰り広げられていた物語〉の存在を何も知らずに過ごす二章から六章までと、「おれ」が二軒目の下宿の

萩野のお婆さんから〈この地で繰り広げられていた物語〉のすべてを知らされることとなる七章以降の二つである。まさに七章から〈「おれ」が新たに加わることによって展開する物語〉が開始するといつていいだろう。「清」の手紙を待ち侘び、待望の手紙が届いたことが発端となつて展開された「おれ」と萩野のお婆さんとの会話は、この地で繰り広げられている二つの出来事を端的に浮かび上がらせるものであった。七章で登場する萩野のお婆さんは「おれ」の知らなかった様々な情報を与えるという意味で、また「清」に代わつていわゆる〈世間の常識〉というものを知らせ伝えるという重要な役割を担っている。例えば赤シャツと堀田とが「それ以来折合がわるいと云ふ評判ぞなもし」(七)と語る時間問題となるのは「それ以来」という言葉であり、これは古賀家と遠山家の結婚話に赤シャツが介入し、それについて堀田が「教頭に意見をしに」(四)行くまでは、「折合」が悪くなかつたことをも示している。これは数学科の教員を何故増員したかという「おれ」の赴任に関わる問題でもあり、赤シャツの謀略が着実に実行されつつあることをも伺わせる部分でもある。またその情報の豊富さについて「おれ」が感心すると、「狭いけれども分かりますぞなもし」(同)と答えるのであるが、これはつまり「去年」(同)古賀の父親が死んでから揺らぎ出した古賀家と遠山家の縁談話の詳細を、萩野のお婆さんのみならず、この地域に住む人間はみなその〈狭さ〉ゆえに知っているということである。しかもここに至つてようやく、「おれ」が抱いていた「世の中は不思議なものだ。虫の好かない奴が親切で、気の合つた友達が悪漢だなんて、人を馬鹿にして居る」(六)という考えが間違つていたことが明らかとなる。まさに「おれ」の直感は正しかつた訳で、「世の中は不思議」(同)でもなく、また「人を馬鹿にし」(同)たものでもないことがここで証明されたのである。「マドンナ」を古賀から奪おうとする赤シャツの企みは、同じ職場の堀田をも巻き込み、今やその地域の住人のみならず、赴任して来たばかりの「おれ」をも巻き込んで周知の事実となつていくのだ。この縁談話が揺らぎ出したその原因をたどると、古賀の父親の死のみならず、「学士」である赤シャツが古賀と「マドンナ」の前に現れたこと、すなわち赤シャツがこの地に赴任してきた時点まで溯ることができるだろう。

赤シャツも「おれ」も東京からやつてきた「渡りもの」(八)なのである。赤シャツが赴任したことで古賀と「マドンナ」の関係に変化が生じたように、今度は「おれ」が赴任してきたことで一つの変化が起ころうとしている。「おれ」は着任してから、まず山城屋の対応に腹を立て、次に下宿の主人「いか銀」(二)の骨董責めに音をあげ、ついには「学校もいやになつ」(三)ている。それは「おれ」の行動のことごとくが生徒のからかいの種となり、「生徒全体がおれ一人を探偵して居る様に思はれ」「何でこんな狭苦しい鼻の先がつかへる様な所へ来たのかと思ふと情けなく」(三)なつたためであつた。しかし「何事によらず長く心配しやうと思つても心配が出来ない男」(同)であるという自己認識のとおり、それら一連の出来事が「うちへ帰つて、一晚寝たらそんなに肝癪に障らなくなつた」(同)その矢先に、バツタ事件が起こるのだ。このバツタ事件は事件そのものというよりも、事件の後の動きの方が重要である。つまり赤シャツが「おれ」と堀田との間を引き離すべく「野だ」と共に海釣りに誘い出したことと、最終的に校長が下した生徒に対する処罰の内容である。赤シャツは自分に「意見をした」(七)堀田を追い出すために生徒を扇動したのは堀田の差し金であることを「おれ」にほめかす。赤シャツにとって「おれ」の存在が利用価値があるのは、「おれ」が「正直で率直であること」に加えて、「赤シャツと「マドンナ」と古賀の間で起こっている事件について何も知らない」という一点に尽きる。確かに六章までは赤シャツの思いどおりに事が運んだかに見えるが、赤シャツの企みを躓かせたのが「野だ」であることには注意が必要であろう。何故ならまず海釣りの場面で、赤シャツの注意にも関わらず「マドンナ」を話題にしたことと、自分が「いか銀」に下宿するために堀田を利用して「おれ」を追い出したことの二点である。「おれ」は分からないなりにこの時点で「マドンナ」が「赤シャツの馴染の芸者の渾名か何かに違ない」(同)と考えているし、「いか銀」の主人と結託して堀田を利用し「おれ」を追い出すことに成功したが、その結果「おれ」が古賀をつてにして萩野家に下宿し、そこで全てを知らされることになるからだ。「野だ」は期せずして赤シャツの邪魔をしているのである。さらにバツタ事件の処罰について考えてみると、職員会議で生徒の穏便な処罰を主張

した赤シャツに職員の殆どが迎合する中で、校長は「おれ」以外にたった一人で生徒の嚴重処罰を主張した堀田の判断に従い、彼の主張どおりの処罰が生徒に課せられたのである。確かに校長はこの場面で「会議の引き続きだと号して」(六)「おれ」が蕎麦屋と団子屋へ出入りしたことを牽制はしたが、結局は赤シャツの思惑とは違う判断を下したということである。東京から流れてきて、学士であることを頼みとして、何でも思いどおりになる如くに振る舞う赤シャツに対する校長の答えと云うていいだろう。

さらに「おれ」自身が耳にし、また萩野のお婆さんが語る生徒たちの教師に対する評価である。「あとで聞いたら此男が一番生徒に人望があるのださうだ。」(二)という「おれ」の言葉が萩野のお婆さんからの情報であつたとしても、「赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がえゝといふぞなもし」(七)という言葉が示すのは、生徒が下した人物評価が「おれ」と同じものであるということだ。「おれ」は生徒たちの言動について「いやにひねつこびた、植木鉢の楓見た様な小人」(三)、「腐つた了見の奴等」(四)、「卑劣な根性」(十)等と手厳しい評価を下しており、確かにそれは一面において正しいものである。しかしその愚劣であるはずの生徒たちは、学校中の教師の中で堀田を最も信頼し尊敬しているということである。彼らの判断は間違つてはいない。これは「おれ」が師範学校と中学との喧嘩に巻き込まれ、翌日新聞に「輕薄なる二賢子」「無頼漢」(十一)として報道された時の生徒の反応にも伺える。「今日の新聞に辟易して学校を休んだ杯と云はれちや一生の名折れ」(同)だとして逃げも隠れもせずに登校し、「教場へ出」(同)た「おれ」に対して、生徒は「拍手を以つて迎へ」(同)るのだ。勿論これらの生徒の行為は揶揄ともとれるが、そもそもこの騒動自体が従来から「犬猿の仲」(十)であつた中学校と師範学校との対立に乗じて、午前中の祝勝会での小競り合いの決着をつける名目で仕組まれた喧嘩であることは、当事者である生徒たち自身が一番よく知っていることである。そしてまたその喧嘩の真ん中に赤シャツの弟によつておびき寄せられた堀田と「おれ」がどのように振る舞い奮闘したかを、一番よく知っているのも生徒たちなのだ。この後赤シャツは他の教員に向かつて、

「自分の弟が山荒を誘ひ出したのを自分の過失であるかの如く吹聴」(同) してまわるのであるが、赤シャツにしてみれば予防線を張る意味での言辞であらうが、これは赤シャツが弟を手先としてこの騒動に関与していることを自ら認めていることでもある。それを聞く同僚の教師たちは「全く新聞屋がわるい、怪しからん、両君は実に災難だ」(同)と口を揃える。確かに悪いのは真実を歪めて伝えた新聞屋であることは間違いない。しかし真相を知ってはいいても、また赤シャツの陰謀にみな眉を顰めつつも、赤シャツが「学士」(七)で「働き」(同)があるゆえにその優位を認め、保身のために反旗をひるがえすことをしないのである。繰り返すが、教師に対する評価にしろ、「マドンナ」をめぐる事件にしろ、「おれ」と生徒たちと同僚を含めてこの地の住人たちの見解はそれほど懸隔のあるものではない。むしろ殆ど同じ反応・同じ見解を下しているといつていい。ところがなぜ生徒たちは相変わらず卑怯ないたずらを繰り返し、同僚たちは当たり障りのない行動をとるかという点、まさに萩野のお婆さんの「卑怯でもあんだ、月給を上げておくれたら、大人しく頂いて置く方が得」(八)であるという言葉に集約されている。まさに「学士」(七)で「働き」(同)があつて、「月給の多い方が豪い」(同)という判断である。ところがこの判断とそれを許す姿勢こそ、「おれ」の許しがたいものなのだ。

### 三 「マドンナ」の選択／古賀の矜持

萩野のお婆さんに代表されるこの土地の住人は、「マドンナ」をめぐる古賀と赤シャツの対立において、赤シャツを非難する一方で「学士」(七)であるがゆえに「働きはある」(同)ことを認めている。しかしここで留意しなければならぬのは、彼らはそれと同じことを考えて、古賀を「見限り」<sup>(11)</sup>赤シャツになびいた「マドンナ」を、赤シャツを批判するより強く批判するという矛盾を犯しているということだ。赤シャツから結婚を打診され、遠山家では「古賀さんに義理があるから」(同)という理由で返事を保留すると、今度は別の「手蔓を求めて」(同)遠山家に入入りす

るようになり、ついに「マドンナ」を「手馴付けて」(同) しまうというのが、「マドンナ」をめぐる赤シャツと古賀の対立の全容であつた。問題はその時に萩野のお婆さんから発せられた次の言葉である。

赤シャツさんも赤シャツさんぢやが、御嬢さんも御嬢さんぢやてゝ、みんなが悪く云ひますのよ。一旦古賀さんへ嫁に行くてゝ承知をしときながら、今更学士さんが御出たけれ、其方に替へよてゝ、それぢや今日様へ済むまいがなもし(七)

確かに古賀家は「土地の人で先祖代々の屋敷を控へる」(同) この地の素封家で、「うらなり」はその一人息子なのであるが、父の死後「人が好過ぎる」(同) ために「欺され」(同) て家産も傾きつつあるというのが実情である。さらに加えて古賀は「大変顔色の悪い男」(二) で、痩せているのではなく「蒼くふくれて」(同) いて、「おれ」が「何所か悪いんぢやありませんか。大分たいぎさうに見えますが」(七) と声をかける程なのである。しかも「おれ」の言葉によれば古賀ほど「大人しい人」(六) もおらず、「滅多に笑つた事もないが、余計な口をきいた事もない」(同)、「在れどもなきが如く、人質に取られた人形のように大人し」(七) いと評されるような人物である。「おれ」は古賀を称して「君子」(六) という言葉を用いるのであるが、「君子」という言葉の当否はさておき、これらの記述から浮かび上がってくるのは、顔色が悪く、常に不健康そうに見え、滅多に笑うことのない無口で陰気な男の像である。しかもたとえ「人が好過ぎる」(七) ためとはいえ、父の死後一年も経たないうちに家産を傾けてしまふような、生活能力の無い男なのである。たとえ赤シャツが現れなかつたとしても、これほど働きのない男もいない。その「マドンナ」の前に「働きのある」「学士」(同) が現れ、彼女に許婚者がいることを承知で様々な方法を用いて求婚してきたのである。しかも赤シャツは「コスメチックと色男の間屋を以て自ら任じてゐる」(同) ハイカラな男である。「おれ」が堀田と赤シャツと「つまり何方がいゝんですかね」(同) と問いかけた時、萩野のお婆さんは「つまり月給の多い方が豪いのぢやらうがなもし」(同) 答えていた。たとえ許婚者がいながら別の男に靡くというのは倫理的に許されない



「所が狭くて困つてるのは、おれ許りではなかつた」

ことであつたとしても、何故彼女が、萩野のお婆さんやこの土地の人々と同じことを考えて悪いのであろうか。この点に関して小谷野敦氏は「マドンナ」の行動を「秤にかける女の現実主義」、また石原千秋氏は「坊っちゃん」から見たマドンナは（中略）単なる現実主義者<sup>(13)</sup>であるとしている。しかし「現実に生きる女」「現実主義者」であるのは「マドンナ」だけではない。「坊っちゃん」の無垢を讃える唯一の存在である「清」もまた、「坊ちゃん」とその兄を秤にかけていたし、手紙の中で「おれ」が同僚にあだ名をつけたことを「人に恨まれるものになるから」「清丈に手紙で知らせろ」（七）と注意していることや、「田舎へ行つて頼りになるは御金ばかりだから、なるべく儉約して、万一の時に差支へない様にしなくちやいけない」（同）とたしなめていることから、十分に「現実に生きる女」であることが理解できる。

この物語の中で「マドンナ」が現実に姿を現すのは二カ所である。一つ目は「おれ」がいつもより「湯に行く時間がおそくなつた」（同）日のことで、停車場で渦中の人々が一堂に会する場面である。

所へ入口で若々しい女の笑声が聞えたから、何心なく振り反つて見るとえらい奴が来た。色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥さんとが並んで切符を売る窓の前に立つて居る。おれは美人の形容杯が出る男でないから何も云へないが全く美人に相違ない。何だか水晶の珠を香水で暖ためて、掌へ握つて見た様な心持ちがした。（同）

ここで「おれ」は「マドンナ」のことを形容するのに、その容姿容貌を直接形容するのではなく、彼女の有り様を感覚的で肉感的な皮膚感覚で表現していることには注意が必要であらう。さらに「おれ」はここで古賀と「マドンナ」母子が挨拶をする様子、その後から「あはて、場内へ駆け込んで来た」（同）赤シャツが「三人へ懇慫に御辞儀」（同）をする様子を見届けている。この時「マドンナ」は「ちつとも見返らないで杖の上へ顎をのせて、正面ばかり眺め」（同）<sup>(14)</sup>、また母の方は「時々赤シャツの方を見るが、若い方は横を向いた俤」（同）であることから、「マド

ンナ」が古賀と赤シャツと双方を意識していることは明らかである。さらに七章においてはこの場面にかけて「おれ」が温泉に入った後で「野芹川の堤」(七)で散歩する赤シャツと「マドンナ」を発見している。これはまた「マドンナ」の母も娘に加担し、温泉まで娘に付き添い(もともと当時の時代背景を考えると、結婚前の娘が一人で温泉場に足を踏み入れるという状況はありえないにしても)、娘と赤シャツが二人きりで逢うことを許しているということでもある。以上のことから理解できるのは、「マドンナ」は母を味方につけ、たとえそれが許されない状況であったとしても、自分で自分の結婚相手を選んだということである。この後漱石は『虞美人草』において宗近一という親が決めた許婚者がいながら小野清三を選ぶ藤尾という女性を造形し、『三四郎』においては野々宮宗八を愛しながら兄の友人と結婚する美禰子という女性を描いた。また『それから』においては一旦平岡に嫁しながら長井代助の求愛を受け入れる三千代という女性を描き、さらに『門』においては同棲する安井の友人宗助と共に生きることを選ぶお米という女性を描いている。まさに『坊つちゃん』の「マドンナ」は、これら一連の(最終的に自らの意志で決められた許婚者、あるいは夫を捨て別の男性を選ぶ物語)のその原型ともいうべき女性なのだ。そして『虞美人草』では藤尾は宗近一を「趣味のない人」(『虞美人草』八)と断定し、藤尾の母は「見込みのない人」(同)という一語で切り捨てていた。また『三四郎』の美禰子にとって野々宮との結婚は野々宮から期待する愛の表現を与えられないことに耐えることを意味したし、今の生活水準を捨てることを意味していた。<sup>(15)</sup> また『それから』の三千代は流産の後夫との仲も冷め、借金返済と夫の放蕩で疲れきっていた時に代助と再会している。『門』においては病気がちの安井との生活の中に「悉く当世らしい才人の面影を漲らし」「寛闊」(『門』十四)な宗助が現れたのである。彼女たちは常に眼前の男にどこか満足できない一点があつて、そこに(働きのある)頼もしい男が現れることで新しい生活を夢見つつ、道ならぬ選択に踏み切ってゆくのである。

一方古賀は「おれ」の前に(おとなしいだけの無力の人)とはまた別の相貌をも見せている。古賀は停車場で「マ

ドンナ」とその母に会つて、悪びれずに挨拶をしているし、また列車に乗り込む際に、真つ先に上等に飛び乗った赤シャツと対照的に、「マドンナ」とその母も赤シャツに続いて上等に乗り込むのを目の当たりにしながら、「おれ」の視線を感じたためもあるが、「躊躇」(七)しつつも「思ひ切つて」(同)いつものように下等に乗るのだ。「マドンナ」の裏切りと赤シャツの企みを知りつつ、常と変わらぬ行動をとるのである。また古賀は、自分の送別会の席で赤シャツと堀田の対照的な送別の辞を聞きつつ、何事もなかったかのように、返礼の挨拶をするのだ。「おれ」はこの時の古賀の様子を次のように語っている。

うらなり君はどこ迄人が好いんだか、殆んど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされてゐる校長や、教頭に恭しく御礼を云つてゐる。それも義理一遍の挨拶ならだが、あの様子や、あの言葉つきや、あの顔つきから云ふと、心から感謝してゐるらしい。(九)

確かにこの様子から「おれ」が考える解釈も可能だが、これだけ酷い扱いを受けながら、「恭しく御礼を云」(同)い、しかもどれだけ座が乱れても「袴も脱がず」「今日は私の送別会だから、私が先に帰つては失礼です。どうぞ御遠慮なくと動く景色もない」(同)態度こそまさに「君子」に相応しい態度だといえよう。古賀はこのようにして、許婚者の裏切りと同僚の陰謀に対して、何も言わずにこの地を去つてゆくのである。

## 結

結局赤シャツに天誅を加えたのは「おれ」と堀田であつた。「渡りもの」(八)であつた赤シャツが、やはり「渡りもの」(同)である。「おれ」に裁かれたのである。「おれ」と赤シャツはこの物語において裁く者と裁かれる者という正反対の存在であるにしても、(途中からこの地にやってきて何らかの事件を引き起こす)という物語構造を支える人物として同じ役割を果たしているといえる。さらに赤シャツと「おれ」は、兄と弟という立場の違いはあるにしても、

やはり兄弟がいる点で共通している。しかも「おれ」が赤シャツの弟を評して「渡りものだから、生れ付いての田舎者よりも人が悪るい」(八)と語ったように、赤シャツの弟は兄の赴任地へ兄に伴われて連れてこられた弟であり、一方「おれ」は九州へ赴任した兄と別れたきり一度も会っていないというように対照的な存在として描かれるのだ。(兄が九州へ赴任していて、兄弟が不仲である)という設定は後に『こゝろ』で、「私」とその兄の関係において繰り返されるのであるが、いずれにしても赤シャツの弟は、これら一連の騒動の引き金となっていることには注意が必要であろう。祝勝会の午後「おれ」の下宿で「赤シャツ退治の計略」(十)を練っているところに堀田を「祝勝会の余興」(同)に誘いに來たのが赤シャツの弟であつたし、また「おれ」と堀田が「踊を余念なく見物して居る」(同)ところへ「人の袖を潜り抜けて來た赤シャツの弟」(同)の通報で、二人は喧嘩に巻き込まれるからだ。「おれ」が何故赤シャツの弟が堀田を誘いにきたのか不審に思ったように、堀田もまた翌日の新聞の報道が仕組まれたものであることを見抜いている。この時点ですでに古賀の延岡転任は決定し送別会も終了しており、これで堀田を辞職に追い込めば赤シャツの陰謀はすべて完了する。そして三日後堀田は校長に命ぜられるままに辞表を提出し、まさに赤シャツの思いどおりに事が運ぶのである。それにしても、前章で述べたように赤シャツがこの騒動に自分の弟が関与していることを触れ回るといふことは、弟を庇うための予防線を張るともとれるが、同時に赤シャツと堀田の不仲を知る人々にとって、弟を使つて堀田追放に手を下したことを赤シャツ自らが認めたことでもある。何故なら赤シャツと堀田の不仲は、萩野のお婆さんのみならず、「おれ」も含めてこの地域の住人の殆どが知るところであるからだ。しかもそればかりではない。祝勝会の午後、堀田がもたらした(赤シャツに馴染みの芸者がいる)という情報は、堀田にとっては「此頃漸く勘づいた」(同)ものであつたが、「おれ」が古賀の送別会の折にすでに気づいていたことであつた。赤シャツにとって不利な情報が、敵対する堀田ですら知るところとなつたといふことは、当然この狭い土地ではすでに周知の事実であつた可能性が高い。新任の「おれ」の行動が悉く、生徒に知れ渡つたように、かつて新任であつたはずの赤シャ

ツも同じようにその一挙手一投足が生徒に注目されていたことが推測できる。野芹川で赤シャツと「マドンナ」が二人きりで逢っていたことも、翌日赤シャツが「おれ」にあくまでしらを切り通したことから分かるように、細心の注意を払っていたはずが「おれ」と出くわすはめになったように、「狭くて困つてるのは」(七) 赤シャツも同様なのだ。まさにこの〈狭さ〉ゆえに、中学校を舞台にして繰り広げられていた出来事のすべてが生徒のみならず、この地に住む人々すべての知るところであったのだ。

かくして事は表面的には、すべて赤シャツの思いどおりに事が運んだかのような様相を呈するが、ただ一つ予想外の出来事は「おれ」の帰京であった。これは「おれ」が校長と談判した折に「学校の数学の授業が丸で出来なくなつて仕舞ふ」(十一) から「考へ直して」(同) ほしいという校長の言葉からも明らかである。確かにたとえ「おれ」が辞めても、また次の募集で新任の数学教師が雇われてくることは明白であるが、学校にとって数学の教師が一度に二人も辞職する事態は不祥事であることには違いない。そしてこの地に、中学校を舞台としたもう一つの〈うわさ〉が残るのだ。「おれ」はこの物語において、この地を去ることによってのみ成立する〈皆が知っていても誰も手を出さなかった不正を暴き、天誅を加え、一カ月で学校を辞めた英雄的教師〉、すなわち〈無鉄砲のゆえに損をする人物〉という役割を果たしたのである。

『坊っちゃん』において、四国に赴任した「おれ」が決して良くは評価しなかった生徒や土地の人々との間に、意識の上では実はそれほどの隔たりは無かった。むしろ出来事の本質を捉え、何が正しく、何が間違っているかの判断は同じだったといつていい。ところが同じ判断を下しつつ、事の真相を見極めつつ、不正を暴くことは「損」(一) であるという判断から赤シャツの不正を見逃すのがこの土地の人々であった。「おれ」はこの体質を許すことができずに、周囲と衝突し、あえて「損」をすることを選び取ってゆく。この一点において、「おれ」と周囲の人々との間には、深い大きな溝が存在するのだ。この時に自分の判断の基準となり、自分の考えを正当化する理由として、「清」のことが思

い出されていたことには注意が必要であろう。まさに「おれ」における「清」の「価値の再発見」<sup>(16)</sup>がなされているのだ。そのためにもこの一カ月の中学校を舞台とした一連の出来事が要請されたといえる。

註(1) 有光隆司氏(『坊っちゃん』の構造―悲劇の方法について「国語と国文学」一九八二年八月)は、この点について「男がこの地で遭遇し、やがて顕在化する『大事件』、すなわち、遠山家の令嬢を中心に、教頭、古賀、堀田らの間で次第にその輪が広がり、鮮明化されてゆく一つの根本的な『大事件』は、じつは男の存在如何にかかわりなく、彼の赴任以前からすでに始動していたものである」<sup>(17)</sup>ることを指摘する。論者はさらに『吾輩は猫である』から『坊っちゃん』を経て『三四郎』に至るまでの一連の作品が、有光氏の指摘する「彼の赴任以前からすでに始動していた」物語を含む三つの物語をすでに内包していることを指摘するものである。

(2) 山田晃『坊っちゃん』論『作品論夏目漱石』双文社一九七六年九月

(3) 高木文雄「親譲りの無鉄砲」について「金城学院大学論集・国文学篇」二十一、一九七七年十二月

(4) 小泉浩一郎氏(『坊っちゃん』の構造―マドンナの領域「注釈と批評」3、東海大学注釈と批評の会、一九九七年三月)は、「父親と坊っちゃんの間には公平な相互理解への、少なくともその糸口だけは示されている」と指摘する。

(5) (6) 平岡敏夫『坊っちゃん』試論―小日向の養源寺―『漱石序説』一九七六年十月

(7) (8) 高木文雄『坊っちゃん』一面―一九〇六年の漱石―『金城国文』五十六、一九八〇年三月

(9) 途中で回想であることが明らかとなる文章が挿入される形式は、後に『行人』において再び採用されている。『行人』の「兄」の章で「自分は今になつて、取り返す事も償ふ事も出来ない此態度を深く懺悔したいと思ふ。」(四十二)、「今の自分は此純粹な一本調子に対して、相応のであるが尊敬を払ふ見地を具へてゐる積である。けれども人格の出来てゐなかつた当時の自分は、たゞ向の隙を見て事をするのが賢いのだといふ利害の念が、斯んな問題に迄付け纏はつてゐた。」(四十三) という文章の傍線部では明らかに「今」と「当時」が明確に分けられ、「今」は理解できることが「当時」は出来なかつたことが語られるのだ。

(10) 小森陽一『坊っちゃん』の〈語り〉の構造―裏表のある言葉―「日本文学」一九八三年三月・四月

(11) (12) 小谷野敦『夏目漱石を江戸から読む』P・三十四・六十六、中央公論社、一九九五年三月

(13) 石原千秋『漱石の記号学』P・二三四、講談社、一九九九年四月

(14) 小泉浩一郎(『坊っちゃん』の構造―マドンナの領域「注釈と批評」3、東海大学注釈と批評の会、一九九七年五月)氏

「所が狭くて困ってるのは、おれ許りではなかった」

は、この場面で赤シャツの方を見ようとしめないマドンナの行為こそが「逆に彼女における赤シャツとの約束を世間の目から隠蔽する主体的な決断の強固さを浮き彫りにする証左」であるのみならず、マドンナと赤シャツの力関係をも暗示する箇所として重要な場面であることを指摘している。

(15) 美瀬子の結婚については拙論『私そんなに生意気に見えますか』―『三四郎』論(「玉藻」三十五号、フェリス女学院大学日本文学科紀要、一九九九年十月)を御参照願いたい。

(16) 亀井秀雄『坊っちゃん』―「おれ」の位置、「おれ」の欲望―「国文学」三十七巻五号、一九九二年五月